Sanpō Books

Sanpō Books

作詞入門

阿久式ヒット・ソングの技法

阿久悠（あくゆう）

Sanpō Books

SANPŌ BOOKS——16

作詞入門——阿久式ヒット・ソングの技法　¥ 380

昭和47年5月30日　初版発行

著者　阿久（あく）　悠（ゆう）
東京都港区芝神谷町18　芝中央M・203

発行者　中島　宏

発行所　株式会社　産報（さんぽう）
東京都港区浜松町1—10—17（〒105）
電話東京（436）4151（大代表）
振替　東京36786

印刷　壮光舎　製本　秋元製本

日本音楽著作権協会第470894号承認済
万一，落丁・乱丁がありましたら，お取りかえします。　*Printed in Japan*
0376—610316—2779
© 1972 *Yū Aku*

Sanpō Books

作詞入門

阿久式ヒット・ソングの技法

阿久悠（あくゆう）

Sanpō Books

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

目次

序章　だれでもなれるわけじゃない
——プロの資格について25のテスト／7

第Ⅰ章　歌は世につれというけれど
——阿久流現代作詞論／15

1　企画からレコーディングまで／16
2　作詞は文学じゃない／26
3　人間的コンピュータ／45

第Ⅱ章　「この道一筋」はもうふるい
——**ぼくはこうしてデビューした**／55
1　詩が嫌いで映画好き／56
2　あせらず騒がず少しずつ／65
3　作詞家と呼ばれて／74
4　走りながら充電する／78

第Ⅲ章　ヒットは見うして生まれた
——**阿久式ヒット製造法**／85
1　サイケデリックな原色のイメージ／86
2　山を選ぶか海をとるか／93
3　ブランクを考えさせない曲／97
4　思いきってタブーを破る／110
5　新しい別れへの共感／118

6　安いオモチャをふんだんに／125
7　女性歌手のスケールの限界／137
8　斜陽の演歌とはいうけれど／145

第Ⅳ章　こうすれば詞が書ける
——阿久悠作詞学校／151

基本篇　最低の約束事はマスターしておこう／153
1　詞にはメロディがつくものである／154
2　これまでの詞のパターン／154

トレーニング篇　たくさんのひきだしを作るために／164
1　ボキャブラリーを豊富にしよう／165
2　目つきを鋭くしよう／172
3　イメージを広げよう／176

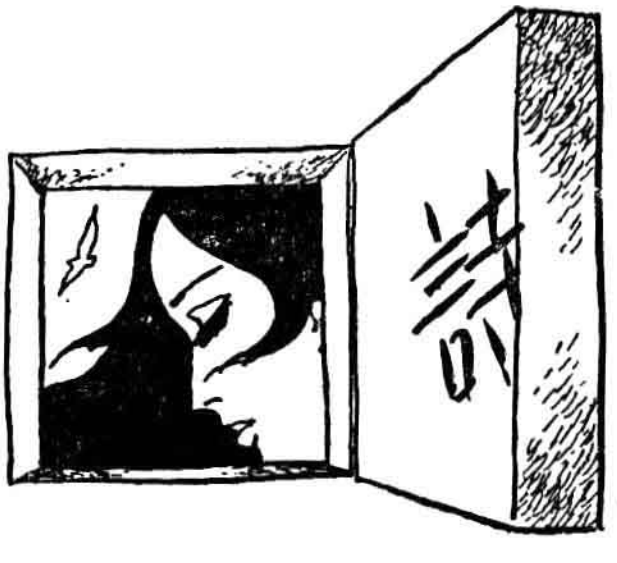
実践篇　阿久流作詞テクニック／182
1　テーマの選び方／182
2　素材のとり方／187
3　技術について／189

別章　だれに見てもらうのか
――作詞家になりたい人に／197
1　人材は求められているが詞は求められていない／199
2　これまでどんな売りこみ方法があったか／200
3　どんな窓口があるか・どんなアタックをすればいいか／214

（表紙・本文イラスト／上村　一夫）

序章　だれでもなれるわけじゃない

——プロの資格について25のテスト



☆自信家はゴマンといるけれど

だいたい〝入門書〟と呼ばれるものは、「キミにも○○ができる」というのがキャッチフレーズになっている。この本なら、さしずめ「キミにも作詞ができる」ということになるのだろう。しかし、ぼくはそういうものがいちばん嫌いなのだ。

「キミにもできる」というのは非常なまやかしであって、だれにもできる程度の詞を書いたって、実際はなんにもならない。

普通のやつにはできないような詞を書けなければ、プロの作詞家としてデビューもできないし、ましてヒットを出すこともできないだろう。

だれにも書ける程度の詞なら、入門書を読まなくたって書ける。そこからしてすでに入門書というものはまやかしなのだ。

多くの入門書が「キミにもできる」といえるのは、それが技術指導書だからで、たとえば、作曲家になるためには、どうしたって〝譜面を書く〟という技術が必要である。だから、その技術を教えてやって、「さあ、これでキミも作曲ができる」といえるのである。今でも「自分は作曲家になれる」と思っている人は少ない。

しかし、作詞の場合には、「自分は作詞ができる」と思っている人がゴマンといるのだ。ゴマンとどころか、ほとんどの人はそう思っているに違いない。なぜなら、この場合の技術は字であ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

って、その字はだれでもが書くことができるからだ。文章だって、まあまあ書ける。そこで作詞でもやってみようかということになる。すると、作詞らしいものの二つや三つは、だれにだってできるのである。

作曲の場合とは、ここが違う。それが困るのだ。

オリジナリティがあるかないか、商品価値があるかないかは抜きにして、どこかにあったようなことばを拾い集めれば、詞と呼べそうなものはなんとなくできる。

これと同じレベルで「キミにも作詞ができる」とはいいたくないし、また、そうなっては困るのだ。

この本でいう〝作詞家〟とは、自己満足型や自己陶酔型のアマチュアではなく、年間何十曲というヒットソングを創り出せるプロの作詞家のことである。

そこで、最初に、テストをしてみたい。

あなたに、持ち点として一〇〇点をさしあげよう。そこからスタートして、次の二五項目のテストを読んでほしい。それぞれの項目について、自分はマイナスだと思ったら、四点ずつ引いていく。いわゆる減点法である。何点残るだろうか。

このテストによって、作詞家を断念しなければならない人がかなりでてくるはずだ。

☆あなたに素質があるかどうかのテスト

1　「キミは人を見る目があるね」と一度もいわれたことのない人はマイナス

2　会議やミーティング、ディスカッションで、いつも絶対多数派にしか入っていない人はマイナス

3　詞以外のもので、たとえば絵、写真、小説といったクリエイティブなもので、ほめられた経験のない人はマイナス

4　乱読家、雑学博士、などの名称で呼ばれたことのない人はマイナス

5　書斎が好きで、町なかや旅行などにあまり出ない人はマイナス

☆あなたの性格が作詞家向きかどうかのテスト

6　自己愛の強すぎる人はマイナス

7　芸術家肌と称して、気分に左右されやすい人はマイナス

8　欲望をコントロールできない人はマイナス

9　ギャンブルの好きな人はマイナス

10　儲からなくてもいいという人はマイナス

☆あなたの感覚が作詞家にふさわしいかどうかのテスト

11　コマーシャルが嫌いだからとＮＨＫばかり見る人はマイナス
12　書斎、黒檀の机などに憧れを持っている人はマイナス
13　詩こそわが命といって、他に目を向けない人はマイナス
14　宝島を信じない人はマイナス
15　ホステスを不幸な女だと思いこんでいる人はマイナス

☆あなたに必要な技術があるかどうかのテスト

16　メモをしなければ記憶に自信のない人はマイナス
17　あだ名をつけるのがへたな人はマイナス
18　品物を見て、その原料や産地を一度も考えたことがない人はマイナス
19　流行の予想が当たらない人はマイナス
20　一日の新聞から詞の素材を五つ以上選べない人はマイナス

☆あなたに必要な体力があるかどうかのテスト

21　一日五時間以上の睡眠を必要とする人はマイナス

22 疲労がありありとわかる顔だちの人はマイナス
23 一日に五つの打合わせ、二つの立会い、三つの創作、実働一八〜一九時間をこなすスタミナのない人はマイナス
24 食欲不振で、とくに胃、肝蔵に欠陥のある人はマイナス
25 セックスに淡白な人はマイナス

さて、何点残っただろうか。

ここで重要なのは、このテストが「何点なら合格」というものではなく、一〇〇点を要求するものだということである。六〇点だからいいというものではない。プロの作詞家になるためには、一〇〇点を要求される。

ただし、これはあくまでもぼく個人の流儀による基準であって、まったくこの逆を行って成功する可能性もないわけではない。

いずれにしても、このテストで、「だれでも作詞家になれる」というのはウソだということをわかっていただけたと思う。また、あなたの中で、作詞家に向いている部分とそうでない部分がわかっただろう。

つねにヒット曲をとばす、いわゆるランキング作詞家は数人しかいない。その中に入るという

のは非常にむずかしいことなのだ。

☆あなたにもチャンスはある

しかし、むずかしいだけに、作詞の世界には欠員も多い。どんどん仕事をこなしていける人が少ないわけで、年間何千曲という新曲をほとんど数十人でやらなければならないのが現状である。だから、その足りない部分をめざしてがんばれば、やりがいはあるだろう。

歌謡曲は、教えたり教えられたりするものではない。

にもかかわらず、この本を出すのは、ぼくという一人の作詞家の考え方、発想法、姿勢、歩みといったものを、臨床実験の報告書のように洗いざらい述べてみることが、まったく無意味ではないと思うからだ。

その中からあなたが何を引っぱり出すか。

「この部分は共感できるから利用しよう」とか、「これは阿久悠がまちがっている」とかいった、あなたなりの考え方を持ってくれればそれでいい。そういった、自分にトクになるものを一冊の本の中から引っぱり出せるということも、これからの作詞家に必要とされている資質の一つではないだろうか。

☆作詞に方程式はない

「こうすれば作詞家になれる」というものは絶対にない。

ぼくがどうやって作詞家になったかを書いても、そのとおりにやったとすると、その時点ですでに何年かずれてしまう。ぼくが『また逢う日まで』をこういうふうにやって成功した、と書いても、そのとおりにやってできた曲は、絶対にヒットしない。すでに一年ずれているからだ。

「去年、阿久悠がこうやったのなら、今年はそれをこう変化させてみよう」と考えてほしい。そのくらいのことを自分で考えられないようでは、作詞家になどなれっこない。

作詞に方程式はない。絶対にない。あったとすれば、それはもう古くて使えない。その方程式からは、新しいものは出てこない。そこで、自分なりの方程式を創らなければいけない。

計算の達者な人が数学者になれるわけではない。新しい方程式を考えることのできる人を数学者と呼ぶのである。

一〇〇曲書くうちに五〇曲は、他人の作った方程式に自分なりの数字を当てはめて計算するということがあってもいい。が、すべてがそうであってはいけないと思う。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com